

動き出したアラスカの天然ガス開発

(財) 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

北米、そしてアジア太平洋の将来の天然ガス市場を展望する上で、新たな動きが出てきた。米国・アラスカにおける天然ガス開発と輸出に関する新展開である。

3 月 30 日、アラスカ州のパーネル知事は、アラスカ州北部のポイント・トムソンガス田のリース権に関する多年に亘る係争について、エクソンモービル・BP・コノコフィリップス等と和解が成立、同ガス田を含むアラスカでの新たなガス開発・輸出計画に向けた道筋が開かれた、と述べた。また、同知事は、上述の石油大手 3 社とトランスカナダ社が協力して新たなパイプライン計画を検討する、とも表明した。この 4 社は、アラスカ・ノーススロープの豊富なガスを開発し、アラスカ州の南西側から LNG として輸出する計画を検討する、としている。

係争となっていたポイント・トムソンガス田については、石油会社が長期に亘ってリース権を持ちながら開発していないとして、アラスカ州政府はリース権取り上げに向けて動いていた。しかし、今回の和解により、石油大手 3 社はリース権を維持し、ポイント・トムソンガス田の開発の第 1 フェーズに向けて動き出すことになる。ポイント・トムソンは、アラスカの主要な石油・ガス生産地であるプルドー湾から東に 60 マイルに位置し、8 兆立方フィートの天然ガスが賦存しているとされる。また、ノーススロープ全体では 35 兆立方フィートの発見済み天然ガスがあり、ポイント・トムソンの開発はアラスカの天然ガス開発全体にとって、戦略的な投資になる、とも見られている。

開発されたガスは地元での消費にも利用されようが、さらに重要なのは、開発されるガスが、LNG としてアジア市場に向けて流れる可能性があることであろう。もともとノーススロープの巨大なガス資源に関しては、開発後の販路として、カナダ経由でパイプラインを敷設、米国本土 48 州向けへの供給が念頭に置かれていた。しかし、巨額の投資を必要とする長距離パイプライン計画の経済性に伴う不確実性等もあって、実際には計画の進捗は無く、長期停滞の状況が続いていた。しかも、後述するように、最近では米国における「シェールガス革命」の結果、米国の天然ガス価格が直近では 100 万 BTU 当たり 2 ドル以下となるような低価格状態とガス供給過剰の状態となり、米国向け販売計画は根本的な見直しを迫られていたのである。

こうして動き出したアラスカでのガス開発計画を巡る新展開の背景には何があり、その重要性・インプリケーションをどう見たらよいのだろうか。

まず、第 1 には、米国全体としてのガス需給の構造的な変化が背景要因として重要なものと言うまでもない。先述の通り、2000 年代の前半までは、米国では国産ガスが徐々に減少

し、輸入の主体となっているカナダからのパイプラインガス供給も拡大は望めないため、LNG 輸入が大幅に拡大する、という見方が「コンベンショナル・ウィズダム」であった。米エネルギー情報局の 2007 年版長期見通しにおいて、2030 年の LNG 輸入量は 1 億トン近くに達するとの予測が示されていた。しかし、シェールガス大增産の結果、米国ではガスが大幅な供給過剰になり、価格は 2 ドルを割り込むまで低下した。LNG については、最新の 2012 年版見通しで、EIA は 2030 年時点には米国は LNG 純輸出国になる、との予測を示している。まさに、米国ガス市場では革命的な需給構造変化が起こり、その新たな環境の下で、州政府・関係企業共にアラスカの資源開発を考える必要に迫られた、ということである。

第 2 には、アジアの天然ガス市場におけるガス需要増大への期待である。クリーンで豊富な資源量と供給安定性などのアドバンテージを持つガスは、世界でも、そしてエネルギー需要が特に大きく伸びるアジアでも、今後需要が大幅に増大していく。LNG についても、既存の主要市場である日本、韓国、台湾に加え、新興市場として中国、インド、さらには新規市場としてのシンガポール、タイなど、多くのアジア諸国で大きく需要が伸びる可能性がある。また、価格決定方式の差など、市場構造の違いから、アジアのガス、特に LNG 価格は欧米（中でも米国）市場価格に比べて大幅に高い。直近時点では、米国価格が 2 ドル程度であるのに対し、アジア LNG 価格は 16 ドル前後と極端な格差となっている。増大する需要と大きな価格差を目の前にして、やはり関係者が新たな機会・チャレンジとしてアジア市場に目を向けるのは当然である。

第 3 には、アラスカの事情もある。アラスカはプルドー湾の開発で全米でも有数の石油・ガス産出州となった。石油生産はピークとなった 1988 年には 200 万 B/D を超え、全米生産の約 4 分の 1 を占めた。しかし最近では減産が進み、生産量は 60 万 B/D とかつての 3 分の 1 になり、しかも更なる減産が予想されている。他方、本土 48 州のほうでは、シェールガスおよびシェールオイルの増産で、新たなブームが起きて活況を呈するなどの動きがあり、アラスカは石油・ガス生産州としての相対的なポジション低下に直面していた。その意味では、保有する豊富な資源開発を進め、経済・景気・雇用対策を進めていく背景要因が存在していたといえよう。

もちろん、アラスカにおけるガス開発は決して容易でない。多年に亘って開発が大きく進んでこなかったことの原因として、環境保全の重要性・厳しい気候条件への対応、巨額な投資の必要性、技術的なチャレンジなど多々あろう。実際、今回のポイント・トムソン開発に関与する 4 社とも、今後の課題を十分に理解していることは確実である。しかし、アジア市場にとって、アラスカのガス開発が動き出したことは、非常に大きな意味を持つ可能性がある。既にアジア市場向けに、本土 48 州からのシェールガスをベースにした LNG 輸出計画が多数あり、カナダも同様の計画を進めようとしている。今回は、そこにアラスカが新たな参入することになった。アジア太平洋全体に目を向ければ、大規模な LNG 計画を有する豪州、本年の APEC サミットをホストし、アジアの天然ガス・LNG 市場への関与を強めようとするロシアもある。増大していく需要に対して、必要十分な供給が確保され、より競争的な価格でガス・LNG が安定的に調達されることになれば、ガスがより大きな役割をエネルギーポートフォリオの中で果たしていくことにつながる。アラスカでの新展開も含め、アジア太平洋全体でのダイナミックな動きに注目すべきである。

以上

お問合せ : report@tky.ieej.or.jp